

巻 頭 言

2023年度臨床心理学コース紀要担当教員 能 智 正 博

今年も『臨床心理学コース紀要』が完成いたしました。当臨床心理学コースの大学院生が中心となって編集し、教員も含めコースの構成員が論文を執筆したものです。この紀要を出すことで、私たちは1年間の学びの成果を読者の方々にお示しするばかりでなく、コースの1年間を振り返ると同時に当コースの歴史を刻んでいくことにもなります。この第47集もこの1年の成果として、コースを支えて下さった皆様への感謝の気持ちとともにお届けしたいと思います。

この1年間で話題となったことの1つに、チャットGPTなどの生成AIの利用の広がりがあります。本学では、昨年(2023年)5月に「AIツールの授業における利用について」という学生向けの通知を出して、その活用の可能性を積極的に探るとともに、活用上の注意を発信しました。10月には某学会で、生成AIが研究にどう影響するかを考えるシンポジウムがあり私も登壇したのですが、講演者がその会場の聴衆に聞いたところ、半分以上の方が生成AIを使っていると回答していました。その広がりには目を見張るものがあります。

この紀要に掲載されている論文も、部分的にはそうした生成AIのお世話になっているかもしれません。たとえば、先行研究の要約や分類などに、生成AIを使うことも可能ですし、生成AIはそれをうまく配列して論文の体裁を整える際にも助けてくれるようです。便利な時代になりました。しかし手放しで喜ぶことはできません。というのも、今言った程度のことなら生成AIを使って誰にでもできてしまうからです(この巻頭言も、これくらいなら生成AIが書いてくれるのでしょうか)。

生成AIに欠けているのは身体性であると言われています。生成AIは既に流通している言語や画像のパターンを組み合わせてもっともらしい形にすることは得意なのですが、それが立ち上がってくる現実場面での生々しい身体感覚とつなげて考えることは苦手です。逆に言えば、そういう身体性をどれだけ論文に組み込めるかが、これからの論文の評価に欠かせないものになってくるのではないのでしょうか。臨床心理学の論文における身体性とは、少なくともその一部は、実践の現場感覚がその文章から、あるいは文間からどれだけ立ち上がってどれだけ読者に伝わるかにかかっています。

本コースの構成員は、程度の差こそあれ臨床心理学的な実践の現場に関わりながらその関心を結晶化させて、論文にまで仕上げています。まだ関わりも浅く、学び始めたばかりの若書きの文章も含まれているかもしれません。しかし同時にそこには、単なる情報やパターンの整理を超えてその身体性や現場性がどこかに含まれているはずです。それがどれくらい読者の皆さんに伝わるかが問われるところでしょう。また何かの折に読者の皆様からご感想など伺えますと、それがまたそれぞれの筆者の学びになりますし、コースの発展にもつながるかと思います。今後ともよろしくお願いいたします。